

特別講演

根室酪農の現況と今後の方向

根室生産連参事 高山達郎

1. はじめに

根室の農業は、気候が冷涼で日照時間が著しく少ないため、穀菽農業は打ち続く冷害により大きな打撃を受けたことにより、寒地農業を確立することにより農業経営の安定を図るため畜産主体の農業へと変換せざるを得なかった。然も馬産主体の農業が、昭和の初期より細々ながら酪農への転換を行って来たが戦後馬産の衰退と国の補助政策と経済の変動などにより、酪農経営においては、急速な規模の拡大が図られ国内的には全国一の飼養規模となり、EC9か国の平均を大きく上廻る結果となったが、急速な拡大は施設投資等による負債を増加させ、また最近

の乳製品の需給の不均衡による計画生産が実施されて総体的な生産を伸長することが出来ず、これによる収入の増加が出来ない現況にあり、種々な問題を抱えているのが実情であり、若干その内容について触れて見ることと致したい。

2. 根室酪農の主な問題点

1) 一般的に、頭数規模拡大に応じて、農業粗収益及び所得額は増えている。

一般的には、20頭以下より頭数増にしたがって、両方共に増加し、45.1頭以上となると粗収益で36倍、所得で3.8倍となっており、拡大によるメリットが著しい。

2) 全体では、農業粗収益は増加し、農業所得も増加の傾向にある。

昭和50年と56年対比で粗収益は、生乳生産の延びで、1.73倍であるが、所得では、1.29倍となり、粗収益の割には所得は延びていない。所得率は年々低下を来たしているため、55年～56年における大幅な所得率の低下と粗収益の延び悩みは乳価の低迷、計画生産、生産資材の高騰によるものである。

この様に全体では規模拡大のメリットが見られるが、酪農家個々で見ると、規模の拡大の時期、拡大の内容、自己資本の内容、負債額の多寡等種々な条件の違いによって、規模の拡大が必ずしも農家経済の改善と結び付いていない農家も見受けられる。その代表的なものを挙げて行くと、

(1) 負債額の多い酪農家は所得率が低い傾向にある。

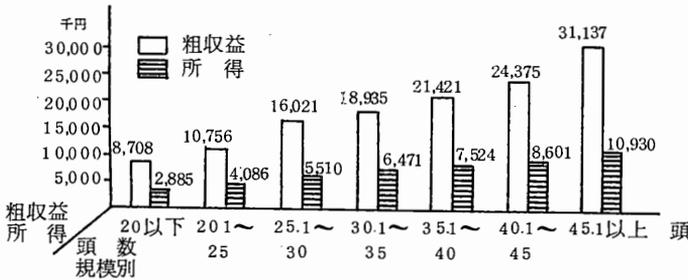


図1 頭数規模別農業粗収益・農業所得 (50～56年の平均)

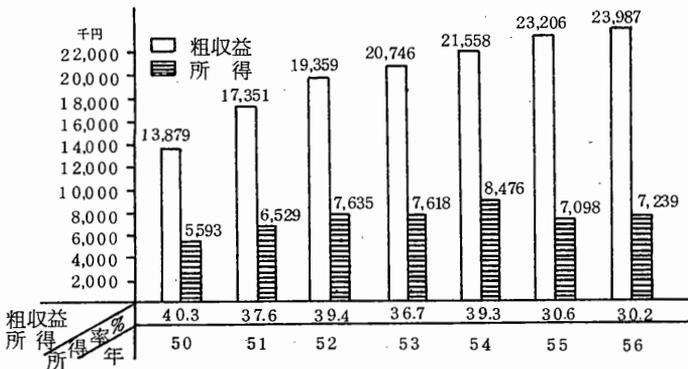


図2 粗収益と所得の推移

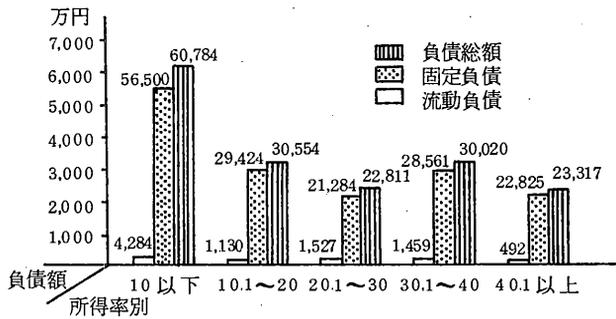


図3 1戸当たり所得率別負債額(56年)

表1 所得率別売上高負債率

項目	所得率10%以下	所得率40%以上
負債額	60,784千円	23,317千円
売上高(粗収益)	32,070 "	25,941 "
売上高負債率	18.95%	90.0%
売上高負債率 = 負債額 ÷ 売上高 × 100		

図3の通り所得率10%以下の農家では60,784千円の負債総額であり、40.1%以上では23,317千円となっており、負債総額の少ない農家の方が所得率が高い傾向にある。又所得率が10%以下を除いた何れの階層も流動負債(短期負債)が少ない。所得率20.1%~30%階層は、施設の設備等を有効に活用していることからその負債額は少ない。

所得率が10%以下の農家は40%以上の農家に比べて、売上高で約600万円多くなっているが、売上高負債率は約2倍と負債の割合が高い。ただ、売上高負債率が300%以上でも、所得率が40%と高く、一方、売上高負債率が50%と低いのに所得率が10%以下と低い場合もある。

平均してみると、所得率40%以上の階層は売上高負債率が90%で、経営的に安定している傾向を示している。

(2) 飼養頭数規模による負債額の傾向は、多頭飼育の頭数に比例していない。

図4、5、6に示す通り、頭数規模階層により負債額が異なり、45.1頭以上が1番多く、次いで40.1~45頭で1番少ない階層は35.1頭~40頭規模の農家で、比較的経営は良好である。規模拡大が必ずしも経営効率と結び付いていない面もある。売上高負債率の増加しているのは、20.1~25頭階層で50年:56年比で約2.2倍、25.1~30頭では約1.7倍となっており、35.1~40頭の階層は自己資本が高く負債額も最低を示している。

(3) 所得率の低い酪農家ほど投下固定資本が多い傾向にある。

図7を見ると所得率10%以下の階層は、40.1%以上の階層に比べて、2.7倍の固定資本を投下しており、また10%以下の階層では建物施設が47.4%次いで、機械の24.6%であり、40.1%以上は乳牛が39.7%、次いで機械となっていて、所得率

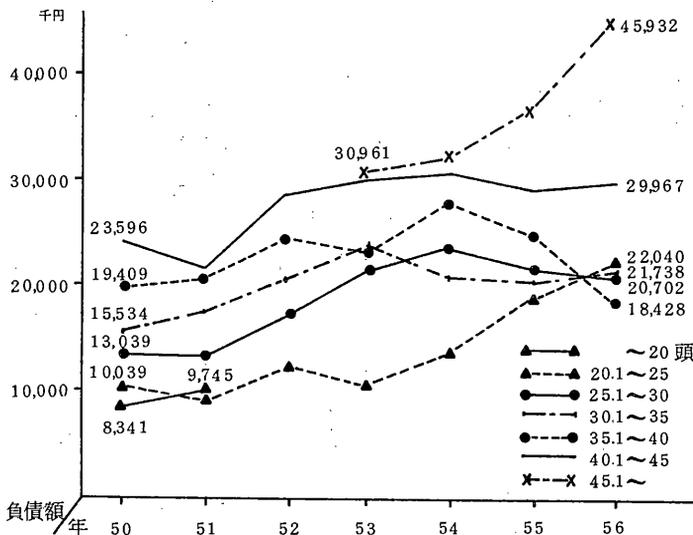


図4 頭数規模別負債額の推移

の高い農家は乳牛そのものへの投資高が高い。
 (4) 生乳生産乳量階層別では固定資本に差がない。また、1頭当り乳量階層別の固定資本の投下も一定していない。

酪農家1戸当りでは図8の通りである。平均4,000Kg以下の階層では、固定資本総額が60,017千円と1番多く、特に土地資本が多い。

他の階層では固定資本別に多少の差があるものの総額では余り差がない。

また、経産牛1頭当りでも4,000Kg以下が1,600千円と高く、やはり土地の占める割合が高い。次いで5,001Kg~6,000Kg、7,001Kg以上の層の順となっている。

(5) 牛乳の生産費の農家間格差が大きい。
 表3で比較すると、1頭当りの所得は、農業費用が最高のA農家では39,082円、最低のB農家では、210,914円と約5倍もの開きがある。この1頭当り所得の差額は、171,832円で根管内平均搾乳牛頭数43頭を乗ずると約740万円の差の金額が年間1戸当りの所得の差となる。

コストの低い農家の1頭当りの乳量は3.2%換算乳量で7,956Kgでコストの高い農家に比べて約14倍も搾っている。よって乳代の単価はほぼ同額と見ると、1頭当りの乳代は約1.4倍となる。一方、購入飼料費はほぼ同額であるが、自給飼料費はコストの高い農家に比べて27%も安いので表6に示す様に自給飼料費をどう低減するかが問題であると考えられる。また、コストの低い農家は減価償却費が安い。特に大農具、建物、構築物は1頭当りの乳量が多く出ていることもあって、約60%も安くなっている。しかし高泌乳牛を揃えているためか乳牛の償却費はコストの高い農家と比べ12%も高い。乳牛の資質に重点をおいているためと考えられる。

費用の2~3割を占めるその他費用においてもコストの安い農家は約54%と半分の低さである。これらの費目の差が

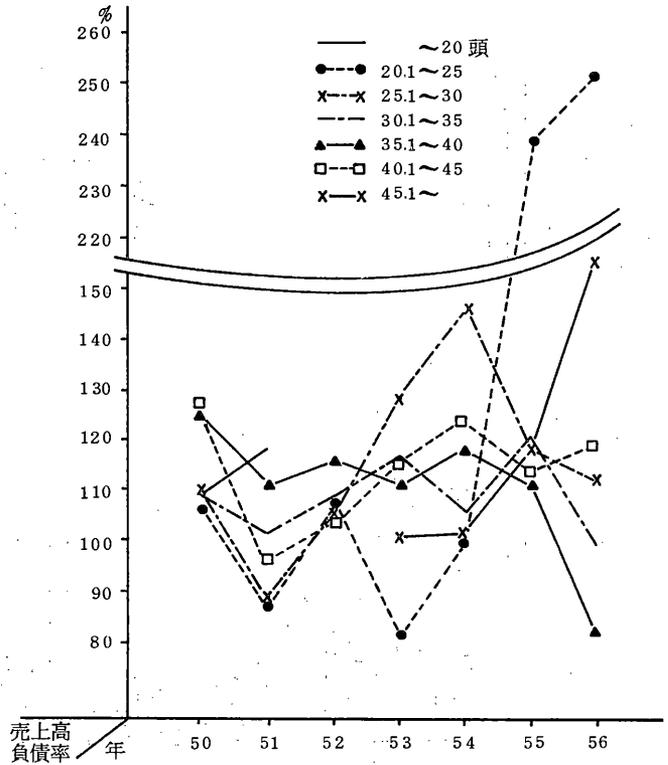


図5 頭数規模別売上高負債率の推移

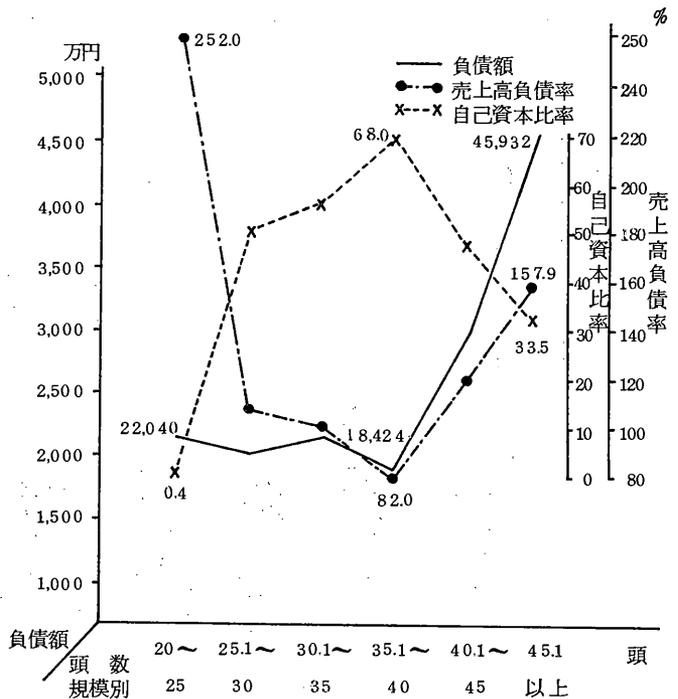


図6 頭数規模別負債額と売上高負債率および自己資本比率(56年)

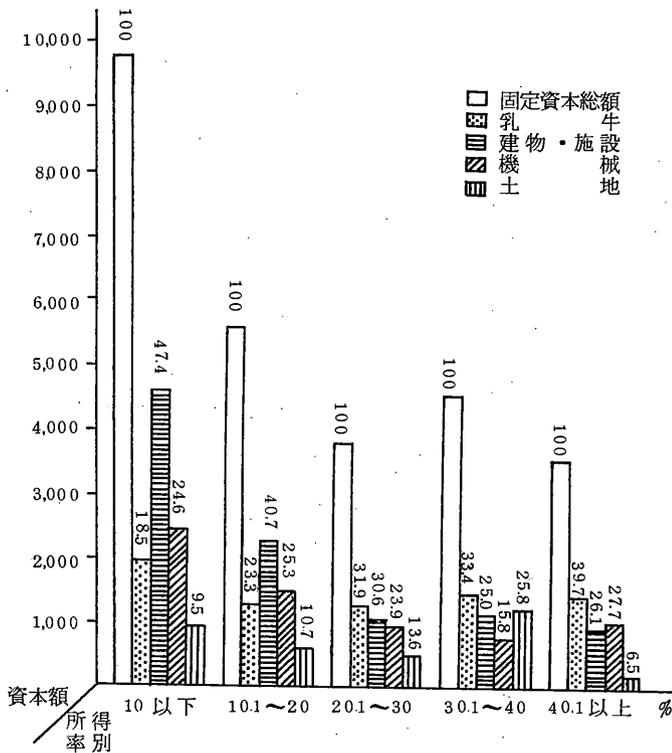


図7 所得率別農業固定資本および投資割合(56年)

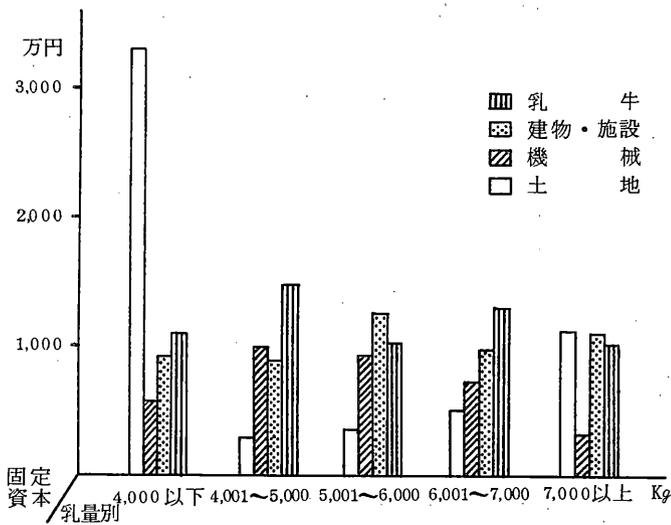


図8 1戸当たり乳量階層別農業固定資本(56年)

農業費用合計でコストの低い農家が27%、牛乳100Kg当り2,101円安くなっている。以上の点からコストダウンには1頭当りの乳量を多くするか、また自給飼料費をいかに下げるかが大きな決め手となると考えられる。

(6) 搾乳日数に大きな差がある。

表7を見ると300日以下の搾乳日数の乳牛が全体の32.2%。特に280日以下の乳牛が13.6%となっており、270日以下と305日搾乳日数の牛では約1,230Kgの乳量の差がある。また、乳代一濃厚飼料費においては1頭当り約10万円の差となり、こ

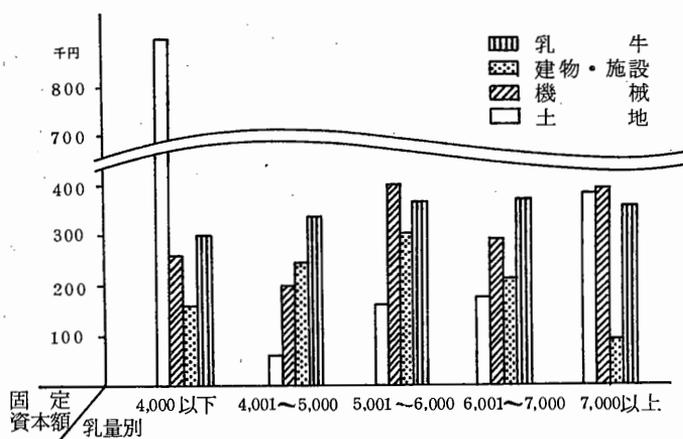


図9 1頭当たり乳量階層別固定資本(56年)

表2 生産費の状況

		53年	55年	57年
平均	頭数	3.21	3.69	3.99
	搾乳牛1頭当乳量 Kg	5,290	6,330	6,110
	100Kg当り生産費 円	9,322	9,609	9,210
最高	頭数	2.30	3.92	2.40
	搾乳牛1頭当乳量 Kg	3,640	3,876	3,902
	100Kg当り生産費 円	17,307	13,453	9,830
最低	頭数	4.60	5.308	4.20
	搾乳牛1頭当乳量 Kg	5,710	6,260	7,968
	100Kg当り生産費 円	5,866	7,013	7,058
最高と最低の差	頭数	2.30	1.388	1.80
	搾乳牛1頭当乳量 Kg	2,070	2,384	4,066
	100Kg当り生産費 円	11,441	6,440	2,772
調査戸数 戸		78	44	22

北農中央会中標津支所調

れに根室内1戸平均の搾乳頭数43頭を乗ずると1戸で430万円の差が生ずる。したがって根室内の分娩間隔は約13ヶ月と言われてはいるが、普通305日間の搾乳日数で60日乾乳1年1産が分娩間隔となって考えられているが、この表の中でも搾乳日数の短い牛程収入が少ないことから分娩間隔が13ヶ月でも問題があり、分娩間隔と搾乳日数を併列したなかで考えて行く必要があると言える。

(7) 1日1頭当りの乳量は6月がピークでそれ以降落ちこんでいる。

図10に管内乳検農家の1日1頭当り乳量を、図11に管内全体の生産乳量をそれぞれ月別に示した。従来、9月の乳量低下が大きいことから乳量の秋落ちといわれているところであるが、乳検成績でみると乳量の低下は6月以降に認められる。

表3 3.2%牛乳生産費の比較(100kg当り 円、58年)

項 目		農 業 費 用		比 較 ②/① %	備 考
		最 高 ①	最 低 ②		
飼料費	購入	1,675	1,728	103	42戸調査
	自給	2,713	1,988	73	
	(計)	(4,388)	(3,716)	(85)	
減価償却費	大農具	630	264	42	
	建物・設備	192	78	41	
	乳牛	454	541	119	
	(計)	(1,276)	(883)	(69)	
その他費用		2,253	1,217	54	②-① kg
農業費用合計①		7,917	5,816	73	
乳代②		8,598	8,467	98	
所得		681	2,651	389	
1頭当乳量(3.2%)		5,739	7,956	139	
1頭当所得		39,082	21,091.4	540	
1頭当乳代		49,343.9	67,363.5	137	

表4 乳検農家別乳代別戸数(57.1~57.12)

乳代単価 農協名	88円 以下	88円 } 90円	90円 } 92円	92円 } 94円	94円 } 96円	96円 } 98円	98円 以上	計
根室	5戸	26	36	4	2	0	0	73戸
別海	0	23	88	47	3	0	0	161
中春別	0	22	88	41	4	0	1	156
上春別	0	3	13	31	26	22	2	97
西春別	0	12	40	46	5	2	0	105
計根別	2	6	45	55	19	2	0	129
中標津	3	34	92	33	1	1	0	164
標津	2	22	56	21	2	0	0	103
計	12	148	458	278	62	27	3	988
%	1.2%	15.0	46.4	28.1	6.3	2.7	0.3	100.0%

表5 乳検農家の乳代-濃厚飼料費別成績(57.1~57.12)

乳代-濃厚費 農協名	330千円 以下	331千円 } 370	371千円 } 410	411千円 } 450	451千円 } 490	491千円 } 530	531千円 以上	計
根室	7戸	11	13	23	13	4	2	73戸
別海	2	10	26	35	49	23	16	161
中春別	2	14	22	35	40	30	13	156
上春別	4	7	13	25	22	13	13	97
西春別	4	8	17	24	24	14	14	105
計根別	3	5	28	25	30	26	12	129
中標津	2	4	23	50	49	23	13	164
標津	0	0	14	15	26	26	22	103
計	24	59	156	232	253	159	105	988
%	2.4%	6.0	15.8	23.4	25.6	16.1	10.6	100.0%

表6 生草収量別 t 当り費用

		～3 0.9 t		3 1.0～3 3.9 t		3 4.0～3 6.9 t		3 7.0～3 9.9 t		4 0.0～t		平 均		
		t 当り	構成比	t 当り	構成比	t 当り	構成比	t 当り	構成比	t 当り	構成比	t 当り	構成比	
費 用	購 入 支 払	円	1,990	51.6%	2,000	59.5%	1,920	62.7%	1,520	57.6%	1,650	64.2%	1,850	60.7%
	(うち購入肥料)	〃	(1,840)	(47.7)	(1,540)	(45.8)	(1,420)	(46.4)	(1,080)	(40.9)	(1,220)	(47.5)	(1,390)	(45.6)
	減 価 償 却 費	〃	610	15.8	420	12.5	450	14.7	480	18.2	360	14.0	430	14.1
	家 族 労 働 費	〃	530	13.7	330	9.8	300	9.8	180	6.8	140	5.4	270	8.9
	自 給 肥 料 費	〃	730	18.9	610	18.2	390	12.7	460	17.4	420	16.3	500	16.4
	費 用 合 計	〃	3,860	100.0	3,360	100.0	3,060	100.0	2,640	100.0	2,570	100.0	3,050	100.0
概 要	作 付 面 積	ha	3 4.3		4 0.6		4 4.6		4 0.8		4 4.6		4 2.0	
	生 産 量	t	29.72		32.92		34.57		37.69		43.54		35.71	
	戸 数	戸	2		16		9		3		7		37	

表7 搾乳日数別検定成績(根室管内 58年)

区 分	検定 実頭 数	一 頭 当 り 乳 量	脂 肪 率	S N F 率	脂 肪 量	S N F 量	一 日 乳 量	濃 厚 飼 料 量	乳 飼 比	飼 料 効 果	乳 代	濃 厚 費	乳 代 濃 厚 費	乳 代 単 価	搾 乳 日 数	体 重	体 重 指 数	産 乳 量 計	戸 数	%
	頭	Kg	%	%	Kg	Kg	Kg	Kg	%		千円	千円	千円	円	日	Kg		t		%
270日 以下	29.2	5,245	3.61	8.56	190	449	20.7	1,205	15.5	44	493	76	417	9153	253	658	8.0	153	59	53
270 ~280	35.2	5,749	3.63	8.58	209	493	20.9	1,342	15.7	43	542	85	457	9174	275	653	8.8	202	93	8.3
280 ~290	36.0	6,009	3.63	8.59	218	516	21.1	1,466	16.3	41	567	93	474	9187	285	651	9.2	216	208	18.6
290 ~300	38.9	6,219	3.65	8.62	227	536	21.1	1,530	16.2	41	589	96	493	9219	295	650	9.6	242	323	28.9
300 ~310	38.4	6,475	3.68	8.64	238	559	21.3	1,575	15.9	41	615	98	517	9251	303	653	9.9	249	318	28.5
310 ~320	36.9	6,428	3.68	8.63	237	554	20.5	1,598	16.0	42	611	98	513	9252	313	649	9.9	237	101	9.0
320 ~330	35.9	6,700	3.74	8.70	250	583	20.7	1,610	15.4	42	642	99	543	9341	323	647	10.4	240	15	1.4
平 均 また は 計	37.2	6,204	3.66	8.62	227	535	21.1	1,506	16.1	41	588	94	494	9222	295	652	9.5	231	1,117	100

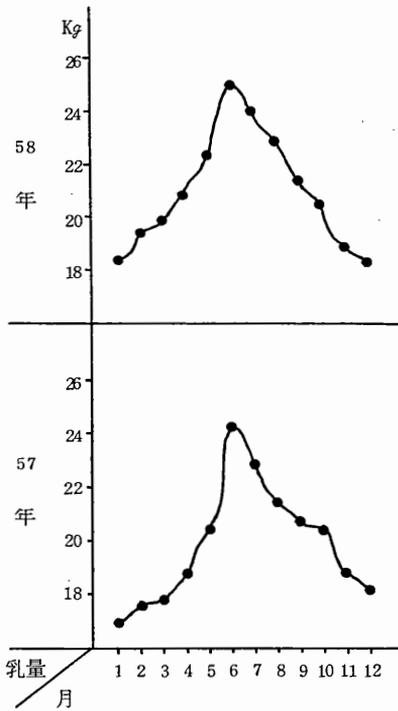


図10 管内乳検農家の1日1頭当たり乳量の推移

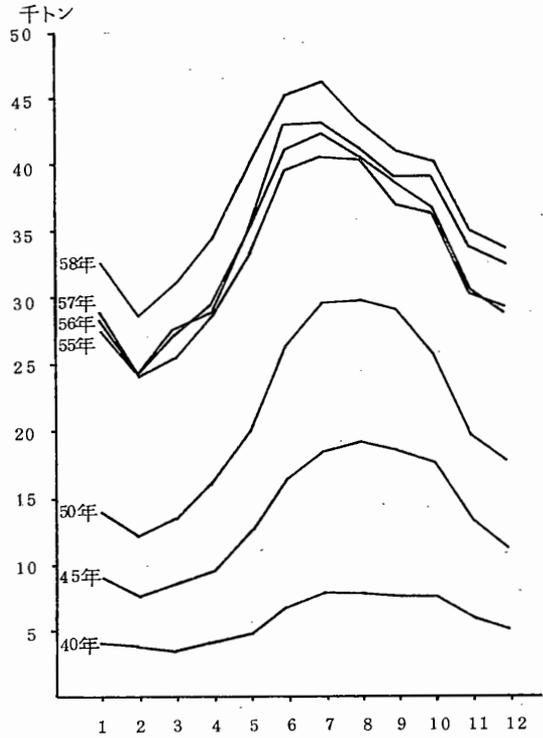


図11 月別生乳生産量の推移

この原因として、分娩のピークが3～4月にあることと、1番草刈取後のTDN量の不足が考えられる。(8) 飼料効果、乳飼比だけで経営効率の判断は出来ない。

図12に昭和58年の管内の乳検農家の濃厚飼料給与量別成績を示した。乳量を多く生産する程、濃厚飼料の給与量は多くなり乳代一濃厚飼料費も多くなる傾向にあり乳飼比は上り、飼料効果は下って来ている。当地方では飼料効果は4.3程度が適当であるといわれているが、これは一つの指標であり、これに固執することなく経済性に力点を置いた評価をしていかなければならない。

3. 根室農業のこれからの展望

根室の酪農は戦後特に昭和40年代国の高度成長期において、第一次第二次の構造改善事業、新酪農村事業等の国の補助政策により、この20年来の急速な規模の拡大で発展をして来たが、前述の如く種々の問題点を持っていて経営の安定している農家もあれば安定していない農家も多く見受けられその格

差も年々大きく開いて行く傾向にある。特に多額の負債を抱えている農家については、低成長期に入った現在これ以上に規模拡大する投資額が減退し、その結果農地の価格が低迷して、資産と負債額とのアンバランスを来し、離農し再出発することが出来ないと言う大きな問題を地域では抱えている。これには国の土地政策あるいは現在行われているリース牧場制度等による新しい経営者との更新を図る必要があると考えられる。

また前述の如く種々の問題点を抱えている酪農であるから平均的な営農指導の対応では今日対応が不可能であり、個別の農家毎にそれぞれ条件が違っているところから、個別指導で然も計数による総合データを重点とした対応が必要である。

酪農家個々においては、更に計数的な経営管理によるコストの低減と個々の生産性の向上を図ることが最重要課題であり、このことが国際競争力にも打ち勝ち国内の需要の拡大を図り自らの経営を安定させる条件であると考えられる。具体的には基本技術を積み重ね、更に高度な技術体系を取り入れ、それ

ぞれの条件を重ねた上で総合的に判断し、有利性の追求を行うならば根室の酪農に更に大きな展望が開けて来るものと確信をするものである。

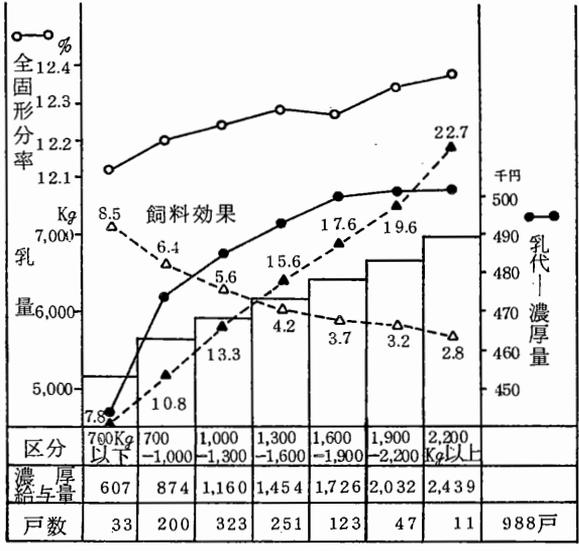


図12 濃厚飼料給与量別成績(58年)